

「ただ、お言葉をください」（マタイ八章五〜一二節）

1 伝道する教会

今日は私どもお互いの教会にとって大切な講壇交換の日です。私個人としてはこれまで何回かおうかがいしたことはありますが、今日は北三番丁教会の牧師として、その意味でちよつと違った思いをもってここに立っています。

その思いとは、ほかでもありませんが、教会は伝道によって生まれ、自らも伝道する教会として歩んで行くという、当たり前といえば当たり前、しかしそのリアルな感情です。伝道する教会として、イエス・キリストを証しする教会として、二つの教会はこれからも互いに協力しながら、この地域の伝道・宣教に励んでいきたいと願っています。

伝道によつて、キリスト教は現在世界で一番多くの人々に受け入れられている宗教となつています。世界でキリストの福音が伝えられていないところはない。人の住んでいるところには、どこにでも教会があるといつてよいでしょう。ですから知らないところでも、旅行したときなど、その土地の教会に行つてみると、聖書が説かれ、讚美歌がうたわれ、主の祈りがとなえられ、礼拝が献げられ、にこやかな教会員の顔を見ると、私どもは心からの喜びを感じますし、連帯感をもちます。とくに外国に行つたときなどは、何かとても安心もいたします。そういう経験をなさつた方は、この中にも、きつと多いことだろうと思います。

たしかにいまは世界のどこにでも教会があります。しかし二千年前、イエス・キリストがこの地上を離れ天に帰られたあと、エルサレムに教会ができたとき、教会はこのエルサレム教会一つしかありませんでした。しかもその教会はみなユダヤ人からなつていました。イエスの弟子たちをはじめとする百数十名のユダヤ人だけからなる集団として教会は誕生したのです。

しかしこのユダヤ人からなる教会が、同じユダヤ人から迫害を受けて、使徒も信徒もその多くがエルサレムから、他の町に、他の地域、パレスチナ以外の地に逃れていく中で、また逃れた先で力強く伝道する中で、ユダヤ人でない人びと、聖書では異邦人といえます（ユダヤ人から見れば外国人）、彼らの中から教会に加わる人たちが現れたのです。時間が経つにつれてその数が多くなり、やがて教会はそうした異邦人が主流を占めるようになっていきました。

それとともに、キリスト教は、ユダヤ人によつて重んじられていた律法中心の考え方から、信仰中心の考え方に変わっていきます。律法・掟に縛られない、そうしたもののから自由なところで成り立つ信仰、むしろ律法を自分の中に位置づける信仰、その生活が、福音の本質として明らかにされるのです。こうした福音に生き、それを体現し、宣べ伝え、後々の教会の基礎を作つていった人が使徒パウロという人です。それがパウロの宣べ伝えた、多くの手紙に書き残された福音です。今日の教会はそうしたものを基礎としています。ユダヤ人だけでない、ユダヤ人以外の諸国民、私どもも含めて世界の人びとが、まことの神を知り、この神を自分の神とし、その救いにあずか

るといふ、あずかりうるという、今日の世界の教会の使信、土台がそうして築かれたのです。

その場合、こういう疑問をもつ人もあると思います。それならキリスト教というのは使徒パウロがつくった宗教なのでしようか？ と。その答えは、はっきりしていません。否です。そうではありません。復活したイエス・キリストと出会い、人生の転換を遂げ、生きるも死ぬるも主のため、キリストのためとして生きたパウロ、彼は「イエス・キリストというすでに据えられている土台」（第一コリント三・一一）以外のものをもって土台としようとはしませんでした。ユダヤ人だけでなく、律法を知らなくとも救いの道はすべての人に開かれている、そうした使徒パウロの立場も、じつはすでにイエス・キリストにおいて明らかになっていたことの延長において示されたものなのです。

さて私どもに今日与えられている聖書は、ユダヤ人でない、まさに一人の異邦人、百人隊長の救い、彼の僕があずかった救いを語っています。イエスの経験したことで、こうしたケースは少なくありませんでした。イエスがその宣教の働きの中で時に経験せざるをえなかったのは、ユダヤ人ではなく、むしろ異邦人の中に、すぐれた信仰を見いだすということでした。

2 一人の異邦人、百人隊長

あらためて今日の聖書に注意してみましょう。

イエスがカファルナウムに戻ってきたとき、一人の百人隊長がイエスのもとに近づいてきて、中風のためひどく苦しみ、いま家で寝込んでいる僕をいやしてくれるように懇願したのです。

カファルナウムに戻ってきたといま私は申しましたが、カファルナウムはイエスがガリラヤ伝道の、いわば拠点にしていた町です。湖畔の町でしたが、イエスはそこに住んでいたと伝えられています（四・一三）。ですから、カファルナウムに入られたというのは家に帰ってきたといつてよいのです。

それを見計らったように一人の百人隊長が近づいてきました。「近づいて」と簡単に書いてありますが、同じ出来事を記したルカによる福音書（七章）では、ユダヤ人の長老たちを介してイエスに助けを依頼したと書かれています。長老たちはこの百人隊長はユダヤ人を愛し会堂まで建ててくれたよい人だといって一生懸命仲介の労をとったのです。百人隊長はローマの軍人で、ユダヤ人ではなく、イエス・キリストと直接に関わりをもつことは出来ないでいたのです。

ルカが物語っているように人を介して近づいたとしても、マタイのこの箇所のように、直接イエスのところに来たとしても、イエス・キリストへの心からの信頼は明らかです。それをイエスは感じとり、すぐに「わたしが行って、いやしてあげよう」といわれます。この言葉で「わたしが」が強調されています。「あげよう」というのは日本的な言い方です。むしろ、こうです、「わたしが行って、彼をいやす」。強い意志を表す言葉です。百人隊長が近づき、そしてイエスが家へ行くこうとしている。近づ

いてきたのが異邦人で、行こうとしているのがユダヤ人、というような見方はここでは重要ではない。ひどく苦しんでいる僕がいるだけです。

「わたしが行って、いやそう」というイエスに、百人隊長はこう答えます。「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます」（八節）。その理由をこう付け加えます。「わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊したがおり、一人に行けと言えば行きますし、他の一人に來い言えば來ます。また、部下に、これをしると言えば、その通りにします」（九節）。

この答えにイエスは感心し、イエスに従っていた人たちに向かって、こういったとあります。「はつきり言っておく。イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」（一〇節）。「感心し」というのは「非常に驚いて」という意味です。別な機会にイエスは、ご自身の使命について、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところには遣わされていない」（一五・二四）といったことがあります。しかしイエスが驚きをもって経験せざるをえなかったのは、イスラエルの中にはなく異邦人の中に、イスラエルに見いだされないような信仰を見いだすということであったのです。

こうした出来事によってイエスは、神の救いが、ただたんにイスラエルにだけでなく、イスラエルに与えられたその恵みは、いわばこぼれ出すようにして、異邦人にも、すべての人に与えられていることを証したのです。使徒パウロをはじめとして後の教会が宣べ伝えた福音、律法から自由な福音、信じる者はみな救われる、ユダヤ人もギリシア人もなく、男も女もない。知恵ある者もない者も、あるいは善い人も悪い人も、信じる者すべてが救いにあずかるという福音は、そうしたイエスの土台の上に築かれたのです。

3 神の言葉の力

いま百人隊長のしたこと語ったことを指してイエスが「イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」といったことを触れました。この「見たことのない信仰」とは、どういう信仰のことをいっているのでしょうか。それを考えたいと思います。

一つの手がかりは、イエスが、百人隊長の答えを聞いてから、それを高く評価し心動かされたことです。

何を彼、百人隊長はいったかといえ、百人の兵士を部下として束ねている自分の経験から推して、神の言葉の権威を告白し、イエスの言葉を神の言葉としてそれに全幅の信頼を寄せるといったのです。

言葉というのは、私ども人間において、私どもの思いの表れ、意志の表れです。思いがあって言葉がある。意志があつて、それを伝達し、あるいは表現するのです。神の言葉も同じです。言葉をもって神は、むろん言葉によってだけではないけれど、もつともすぐれて言葉によって御心を表し、意志を告げ、ご計画を明らかにし、人にも

語りかけます。その言葉を人は聞き、従い、共に歩むことができるからです。

神の言葉は生きています（ヘブライ四・一二）。神が生きておられるからです。その言葉は人のところを動かし、救いの計画をこの世にあつて実現し、教会をつくつていく力をもっています。神はみ言葉をもつて世界を作られた。光あれと言つて光があつた（創世記一・三）。風と湖をお叱りになると、風も湖も従つて静かになつた（八・二三以下）。「イエスは、言葉で、悪霊を追い出し、病人を癒やされた」（八・一六）のです。それがみ言葉の権威です。

百人隊長は、自ら「権威のもとにある者」として、権威とはいかなるものかを知っていました。むろん彼の権威は、ただ自らの部下にしか有効ではありません。しかし神の言葉は、創造し、保持し、御心をもつて治める神の言葉は、この世界を、したがつてすべての地上的なものを、むろんそこには人の生と死も、したがつて病も入りまです、そうしたすべてに対して権威をもつていると、彼はそうように考え、告白したのです。ですから、ただ、お言葉をください。そのお言葉によつて、御心がるからです。生ける神を信ず、それが百人隊長の信仰でした。それがイエスによればイスラエルに見られなくなった信仰です。

百人隊長はそうした権威ある言葉を求めたのです。すべてを創造し支配する言葉です。そしてその言葉に信頼し、委ねたのです。むろん彼はイエスにいやしを強制することはできません。しかし期待して委ねることはできたのです。信仰とはそうした信頼でもあります。

今日の聖書箇所、今日は八章五節以下でしたが、最後に、この前後にも目をとめておきたいと思ひます。

今日の箇所の直前には、らい病（規定の病）を患っている人のいやしが語られています。らい病人もまた当時、イスラエルの中にあつて特別にひどい差別を受けていた人たちです。今日の箇所の直後には、多くの病人をいやしたということが、出ています。その冒頭に、ペトロの家に行つて、その「しゅうとめ」の熱病をいやしたと書いてあります。一人はらい病人です、一人は年をとつた女です。そして私どもの箇所は異邦人です。こうして見ると、これらはみな、当時の社会において、既成の宗教が権威と権力を行使していた時代に、軽んじられ、ときに神の救いの外に置かれていた者たちです。しかしイエスは、それらすべてに救いの道を開いてくださった。神の救いからだれひとり外れていない。信仰によつてみな救われる。これが聖書の示す福音です。今日私どももこれに固く立つて歩みたいのです。

福音は広がつて、救いはここにまで届きました。受けとつた私どもは、これをさらに次に渡していかなければならない。伝道によつて生まれた両教会です。また伝道する教会として協力して歩んでいきたいと願っています。

（二〇一九年一月二七日）